

## 個人的な研究の歩みの回顧

阿部和俊\*

### I 筆者の学生時代（教養部時代）

筆者が名古屋大学文学部の地理学教室に進級したのは1970年4月である。この年は日米安保条約の改定年であり、またヴェトナム戦争という世界的な事件をも背景として、日本の社会全体が騒然としていた。大学もそれらと無縁ではありえず、落ちつかないどころか時として荒廃という言葉があてはまる状況つまり大学闘争・学園紛争の真っ只中であった。

当時の多くの大学、とくに旧帝大ではほぼ完全な教養部制を採用していたので、大学1、2年の時は各学部に進級予定で教養部在籍というシステムである。教養部に籍を置く間、授業は選択した第2外国語によって分けられていたクラスを中心に行われていた。しかし、体育のようにクラスの垣根をこえて行われる授業などで、意見交換や情報収集をするうち2、3人は地理科を志望している人がいることは分かっていた。2年生の後期から学部の授業を一部受講できたので、その時に地理学を志望する仲間（4期生と称していた）と互いに顔を合わせるとのことになる。

当時の教養部は語学と一般教養が中心で（現在でもそうであろうが、昔はその傾向がより強かった）、漠然としたレベルとはいえ地理学あるいは歴史学（もちろん、心理学や哲学、経済学、政治学も同じである）を勉強したいという意志を持って大学に入った者、つまり専攻したい分野をすでに決めていた者にとっては欲求不満になりやすいシステムであった。たとえば、文学部などの文科

系の学生にとっても、自然科学（数学・物理学・化学・生物学・地学）の中から2年間で最低12単位を取得することが義務づけられていた。つまり、自然科学の諸分野を半期1コマ（2単位）として6コマ取得する必要があった。

多くの文科系の学生にとって大学の自然科学など容易に理解できるわけがない。自然科学系の先生方も自分のレベルで講義をすれば文科系の学生がその内容など分かりはしないことは承知しているので、ずい分やりにくかったのではなからうか。これはまた、人文社会科学系の先生方が理科系の学生に授業するときも、あるいは同じように思っていたものと推察される。

自然科学の授業内容などもともと未消化のうえ試験が終わるときれいなサッパリ忘れていたから、当時をふり返ってみてもお互いかなり無駄なことをしていたように思う。文学部進学予定の筆者などは自然科学の先生方はそれぞれの分野の科学史をやってくれればいいのにと思っていたが、記憶する限りではそれはお2人にすぎなかった。

しかし、一方において人文社会科学系の先生方の授業も「教養部」の存在意義を弁えた内容とは思えないものが多かった。学部に進級して後の勉学に役立つような（基礎）知識の伝授とはほど遠く、それぞれの教師がその得意分野を、つまり極めて専門性の高い内容のものを喋っていたという印象が強い。

たとえば、政治学の講義はドイツのユンカーについてのものだった。試験が終わったあと、ある総合雑誌にその教師の授業とほぼ同じ内容の論文

\*愛知教育大学地域社会システム講座

が掲載されているのを偶然見つけたときには本当に驚いた。「さすがに大学ではレベルの高い話を聴けるものである」という印象より「こんなものわかる訳がない」と思った記憶がある。要するに当時の教養部のスタッフは教養部の意義をわかっていないのではなく、ほとんど無視していたものと思われる。

また、講義スタイルも全ノート式といって、教師がゆっくりと読み上げるものをひたすら速記するというやり方のものが多かった。冗談ではなく、手首が腱鞘炎になるのではないと思われるほどだった。この授業スタイルは学部に入っても数人の教師によって行われていた。いくらコピー機が普及していなかった時代といっても、教師の方に「わかりやすい授業を行う」というような意識は乏しかったと言われても仕方がないだろう。

こういう不満がマグマのように蓄積され、当時の世相をも追い風にして大学での諸問題が一挙に噴出した、そういう時代である。この後教養部改革が行われたのをみても上述のような不満は筆者の個人的なものではなかったことがお分かりいただけるでしょう。

そもそも、大学の1、2年生を「教養」という言葉で示される課程に括ることが間違っていると筆者は思う。教養という言葉から連想されるのは、「すぐには役には立たないが、もって（知って）いれば自分（人間）が豊かな気持ちになれる」というようなことでないか。大学の1、2年生の間に修得すべきは、進級してから役に立つ学問分野の基礎である。筆者たちの過ごした時代の教養部は旧制高等学校の制度と学風をひきついでいたせいなのか、このところが間違っていた気がしてならない。

ところで、この教養部時代に地理学の講義（堀川侃先生）も開講されていて、2年生になると受講することができた。堀川先生の授業内容は多岐

にわたっていて、たとえば、クリスタラーの中心地理論（のさわり）も教えてもらっている。なぜそれを覚えているかといえば、試験が近づいた時、ある級友から「この六角形とは一体何だ？」という質問を受けた記憶があるからだ。その級友にすれば、地理学を志望している者なら少しはまともな理解をしているはずだと思ったのであろう。無理からぬことである。

しかし、私自身全くそれを理解しておらず、まともなコメントもできず、また「多分テストには出題されないだろう」と根拠のない高をくくって痛い目にあったことを覚えている。教養部時代、筆者は比較的きちんと勉強していて、ほとんどの科目を（優）または（良）で単位取得していたが、この地理学だけが唯一（可）であった。

また、4期生（2年生の後半）として学部の授業を受講できたのは地理学概論—地形学（井関弘太郎先生）だったと記憶している。内容は分かり易くおもしろい授業ではあったが、自分としてはとてもやれそうにはないものであった。つまり、私には自然地理学のセンスなどかけらもないのであるということを改めて思い知らされていた頃である。教養部の地理学は（可）のうえ自然地理学もわからないのに、それでもひるむことなく地理学を専攻したのは、地理的なことが好きだったこともあるが、これ以外自分がまともにやれそうな分野はなかったからである。

## Ⅱ 筆者の学生時代（学部時代）

学部時代は、騒然とした世相の一方、大嫌いな自然科学科目はやらなくてもよいので、それなりに居心地のよい2年間であった。当時の名古屋大学のスタッフは上記の井関（当時助教授）のほか、松井武敏先生と喜多村俊夫先生が教授、そして森川滋先生が助手でおられた。松井先生の授業は「地図学」と「西欧地誌」、喜多村先生の授業は「集

落地理」と「歴史地理」の授業であったと記憶している。もちろん一般授業のほかに演習と野外実習があったことは言うまでもない。このほか、応地利明先生が非常勤講師として「フランス地理書講読」を担当されていた。この授業では驚いたことが2つある。

1つは受講人数が少ないことである。つまり、「ドイツ地理書講読」も開講（松井先生）されていたから、ただでさえ多くない同級生が二分されるのである。このいわゆる洋書講読は3、4年生はもちろん院生も受講していた。そのため、受講者が1、2人ということはなかったものの、5、6人ということもなかった。この頃はフランス語の方がドイツ語より受講生数は常にやや少なかったと思う。つまり、ラツエルの方がブラーシュより吸引力があったのかもしれない。

受講人数が少ないということは「幸せ」であると思うべきであろうが、当時はそう思うよりも頻繁に回ってくる訳出の順番に備えて予習する方が大変だった。英語ならまだしも、大学に入って初めて学んだフランス語のレベルで専門の地理学論文を訳出する（だけでなく解釈らしきこともする）のであるから、これは大変だった。どうしてもわからない所は教養部のフランス語の先生を待ち伏せしたり、研究室を訪れたりして教えてもらったこともある。この時最も丁寧に対応して下さったのが中川久定先生<sup>1)</sup>で、今想い出しても誠に感謝にたえない。

当時の洋書講読は院生も受講していて、修士課程の林上氏がいた。博士課程への進級には2つの外国語の試験が課せられていたので、そのための準備としても洋書講読への参加は役に立っていたのである。年度初め、つまり4～5月の間は彼が頼りだった。年度があらたまりフランス語を選択していた杉浦芳夫氏が地理科に入ってきて、ずい分ホッとした記憶がある。

上述したように、教養部で勉強した程度のフランス語で専門書を読んでいく（読まされていた）のだから、かなり無理矢理ではある。しかし、今思うと、こういう無理矢理さも大事なのではないかと思う。とにもかくにもある程度は上達するし、フランスの地理学が少しはわかったようないい気分にもなれる。たとえば、野澤秀樹氏の著書(1988, 1996)などを読む時にも抵抗感というのを感じないのは、この時の経験が大きい。昨今、ほとんどの大学が英語オンリー（あるいは独仏語の比重の低下）になったと聞かすが、果たしてそういう教育がいいのかどうかはなほ疑問に思う。

驚いたことのもう1つは応地先生の博識であった。それは当時の筆者にとっては、全く呆気にとられるというレベルのものであった。これは杉浦氏も同じ感想であると思う。この頃の筆者の得た知識の大半は彼から得たものであったと言っても過言ではない。

筆者の記憶では、フランス地理書講読の教材としてはHenri Bauligの論文が最初で、次がAndré Meynierの*Histoire de la Pensée Géographique en France (1872- 1969)*であった。その後いくつかの論文を読んで、Paul Clavalの*Régions, Nations, Grands Espaces*も教材となった。全く私ごとであるが、この時初めてPaul Clavalを知り、この人物に興味をもつようになって、1984-1985年に彼のところ（パリ大学IV ソルボンヌ）に留学することになる。Clavalに関しては、その*Essai sur l' évolution de la géographie humaine (1964)*が竹内啓一氏によって訳出（邦題は『現代地理学の論理』1975年、大明堂）されていたことも親近感を増幅させた。

フランス地理書講読の授業には博士課程に入ると参加することはなかった。一応卒業というわけである。しかし、筆者は「せっかくここまでやったフランス語なのに」という思いもあって、フラ

ンス語を忘れないために1人で Jacqueline Beaujeu-Garnier の *La géographie: méthodes et perspectives* を読んでいた。その時に教えを乞うていたのが Jean Cholley先生<sup>2)</sup> である。この本は『地理学における地域と空間』(1978)として地人書房から出版したが、それには応地先生のアドバイスと紹介もあった。

大学に入って、第二外国語としてフランス語とドイツ語のどちらを選択するかということは、名古屋大学では入試の願書に順番づけをする必要があった。ひとえに合格後のクラス分けの資料に使うという大学側の都合によるものであるが、受験生のときからドイツ文学やフランス文学に興味があればまだしも、多くの受験生にとっては「合格すること」が第一であり、合格後のことなどは真剣に考えることはしないだろう。

地理学に興味関心がある者にとっては、どういう基準で第二外国語を選んでいったかといえば、全くの私見であるが、高校の地理の授業でラッツェルとブラーシュのどちらの名前が記憶に残っていたか、ということに影響されたのではないか。我々の世代の高校地理の教科書には、環境決定論のラッツェル、環境可能論のブラーシュという名前は必ず載っていて、地理好きの者にとっては、この2人の偉人の名前だけは身近な存在だった。

このように、鉛筆を転がすような感じで選択した第二外国語ではあるが、その選択の影響は極めて大きい。既述したように、この選択が人との出会いをつくるからである。そして、たとえば学生を終了し、研究者の仲間、つまり学界に入ってから後でも、出身大学の垣根を越えて、フランス語を選択した者は学界のフランス学派と、ドイツ語を選択した者はドイツ学派の人々と仲良くなるからである。余程の語学の達人か勉強家でもない限り、英独仏の3ヶ国に精通することは難しい。その結果、留学する場合も英語圏を選ぶ場合は別で

あるが、フランス語を選択した者がドイツに留学することも、反対にドイツ語を選択した者がフランスに留学することも皆無とはいわないが、極めて稀である。既述したように、筆者もフランスに留学したが、あのときにドイツ語を選択していたら、フランスに留学するなどということは絶対になかった。

### Ⅲ 中枢管理機能論への関心

筆者は次第に都市地理学に興味をもつようになる。その理由は自然地理学、さらに第1次産業の地理学的センスがないことによるが、もう1つは応地先生を通して成田孝三氏、小森星児氏らの研究に触れたことも影響している。卒業論文は「わが国主要都市の経済的中枢管理機能の研究」<sup>3)</sup>としてどうにかこうにか書き上げ、修士課程に進学した。

経済的中枢管理機能による都市研究を始めるようになった契機は、文学部の3年生の時の夏休み井関先生の演習の宿題として、フィールドワークを行ない、9月以降に各自発表するよという課題がだされたことである。

筆者は北九州市の出身で、夏休みに帰省する前から、とにかく故郷をフィールドワークの宿題の対象にしようと決めていた。その理由は、やはり良く知っている街であるし、帰省後に他の地域に出かけて行く気も特になかったからである。また、帰省もせずに、こういう課題に取り組むということも当時の環境では不可能なことであった<sup>4)</sup>。

また、北九州市は1963年に隣接しあう5市が対等という触れ込みで合併をして誕生した都市であり、何かこの辺の事情を調べてレポートしようという程度の意識でもあった。この年は1970年であり、北九州市が誕生してまだ7年程しかたっておらず、対等合併によって誕生した人口100万の都市というキャッチフレーズの心地よい余韻が



残っていた頃でもあった。

そして、北九州市をフィールドワークの対象にしたということは、今思えば、既述したように、自然地理はもとより第1次産業を研究対象とすることも性に合わず、漠然と都市あるいは第3次産業的な事象の研究に既に興味を感じていたことのあらわれであろう。帰省後、筆者は早速宿題を片づけようと調査を開始した。とりあえず、「合併後の北九州市の変容」という仮題を決め、これに役立ちそうな資料を片っ端から集めてみることにした。

どのようなレポートにまとめ、9月にどのような報告を行なったのか、その詳細は自分でもよく記憶していないが、対等合併というふれこみで誕生はしたものの、発展しているのは小倉のみで、他の旧4市は相対的に、場合によっては絶対的に衰退していること、そして何やら重要なものほど小倉の中心地区（後にCBDという用語を知る）に集中しつつあること、その象徴的な動きとして、合併当初は、仮の場所とはいえ、小倉、戸畑、八幡の接する場所に設置された市役所庁舎が、小倉城の横に新しく建設されることが決定されたことなどを報告の中心にしたと記憶している。重要なものとは、つまり都市機能であり、とくに高次な都市機能であって、この点についての興味が3年生の秋以降、中枢管理機能という用語を知るに及んで研究の焦点となっていった。

卒業論文では、北九州市の問題にもはや触れる気はなく、日本の都市を全体的に経済的中枢管理機能でみてみたいと思うようになっていた。その時の中心視点は、日本の主要都市におけるこの機能のあり様と広範囲に及ぶその影響圏（当初は管理領域と呼んだが、後にテリトリーという用語に統一）<sup>5)</sup>の把握である（阿部、1975）。

拙いながらも書き終えた卒業論文は井関先生の薦めもあって『地理学評論』に「わが国主要都市

の経済的中枢管理機能に関する研究」（1973）として投稿し、受理されるという幸運を得た。卒業論文を『地理学評論』に掲載するなどという、夢にも思っていなかったようなことに挑戦できたのも井関先生のおかげである。もし、3年生の夏休みにフィールドワークという課題をもらわなかったら、今日の私の研究はなかったかもしれない。

修士論文は卒業論文の延長線上で取り組んだ。日本の近現代の動向を踏まえ、経済的中枢管理機能を指標として日本の都市を歴史的に検討しようとしたのである。このときの難問は第二次世界大戦以前の時代におけるこの機能の状況を示す資料があるかどうかという点であった。入手できるかどうかではなく、そのような資料が存在するかどうかということさえわからなかったのである。戦後に関しては、日本経済新聞社刊の『会社年鑑』が1951年から刊行されていることがわかっていたが、どうしても20世紀を通しての分析を行いたかったのである。

修士2年の夏休みに「なんとかなるだろう」という気持ちで国立国会図書館に出向いたが、資料の発見は容易ではなかった。蔵書カードを片っ端からめくり、ついに『日本全国諸会社役員録』という書物を探りあて、これで何とか20世紀を通しての分析に目途がつきそうだとわかったときの嬉しかった気持ちを昨日のことにように思い出す。幸いなことに、修士論文も二つに分けて『地理学評論』に投稿し、受理されて掲載された（阿部 1975, 1977）。

昨今の図書館は多くが電子化されていて、「蔵書カードをめくる」というような言葉も死語となりつつある。しかし、私の経験からいっても蔵書カードをめくらなかったら、この資料の発見はなかった。電子媒体の方が検索は早いように思うかもしれないが、実はそうではない。諸会社役員録などという言葉は、その存在を知らなければ、検

索することも不可能であろう。

修士論文をまとめているときから筆者には新しい興味が芽生えつつあった。それは1930年前後の時代のもつ重要性の検討というテーマである。修士論文を書いていた年の秋に第一次オイルショックが発生し、日本の経済はそれまでの高度成長が終焉して先き行きの全く不透明な時代に入ってしまった。終わったとはいえ1960年代の経済の高度成長が日本の主要都市のあり様に与えたインパクトは確かに大きなものがあったと判断する一方、1920年代から1930年前後の変化も戦争という大きな事件を貫通して、戦後の日本の都市に重要な影響を及ぼしている、と考えるようになったのである。このことが眼前の都市研究を行なう一方で、歴史的な研究に筆者を駆りたてた動機である。

博士課程に進級してから以後愛知教育大学に勤務するようになってからも、銀行支店網、電灯電力供給区域、新聞社通信局網、製造業企業の支所展開を対象にして近代日本の都市研究を続けた(阿部 1991)のは、このときの関心が原動力になっている。

経済的中枢管理機能は大都市になるほど都心に立地し、都心を構成する最も重要な都市機能であるが、この都市内立地について、東京・大阪・名古屋を例に第二次世界大戦後のみならず、戦前の状況をも分析したのも同じ動機によっている(阿部1991)。

上述のように、筆者は1973年に初めての論文を『地理学評論』に発表した。それに対して吉田宏氏(1974)から同誌上に反論をいただいた。正直な気持ちは驚きの一言であった。自分の拙論に対してよもや公的な場で反論が出てくるなど思いもよらなかったからである。学術誌上での意見交換や論戦などは自分とは無縁の大家の世界のことではしかなかったからである。

氏の反論に対しては新しい資料とともに出来る

限りの答をつけて1975年の『地理学評論』に掲載した(阿部 1975)。これに対する再反論は同誌上には掲載されなかった。それはやや残念ではあったが、しかし、学界へのデビューが論戦という形で始まった私は幸運だったというべきであろう。

ところで、中枢管理機能という用語を知ったのは、成田氏、小森氏らの研究にふれたからであるが、さらに調べてみると、いわゆる官庁エコノミストと呼ばれる人たちが、この用語を使い始めたことがわかった。具体的には、経済企画庁地域経済問題調査室のスタッフであるが、その代表的な人に永井誠一氏という人がいた。後年、友人の千葉市役所の黒坂直哉氏から同氏の住所を教えていただき、連絡をとった。そして、お会いすることができたのだが、事前にプレゼントしていた拙著『日本の都市体系研究』(1991)を大変に喜んでくれた顔を忘れることができない。

#### Ⅳ 計量地理学の登場

筆者の学生・院生時代の人文地理学を取り巻く、もう1つの重要なトレンドに計量地理学の襲来というのがある。襲来というのも変な表現ではあるが、そのインパクトは筆者には、まさに嵐のような印象であった。

筆者の理解では、計量地理学とは計量的手法を用いて地理的事象を研究する分野である。『地理学辞典 改訂版』(日本地誌研究所 1989)の計量地理学の項には「統計学を含む各種の数学的手法を用いて、地表現象に共通な空間的秩序や空間構造に関する一般的な法則・原理・理論を求める地理学の一分野」(奥野隆史)とある。地表現象…以下の内容は計量地理学固有のものとは思えないので、計量地理学とは前半の、つまり統計学を含む各種の数学的手法を用いる地理学の分野ということになろう。筆者はそう理解している。したがって、計量地理学とは研究の対象をつけた名前

ではなく、分析の手法をつけた名前であるということになる。

英語では計量地理学のことをquantitative geographyといい、そういう書名の本もある。イエーツの『An Introduction to Quantitative Analysis in Economic Geography』は高橋潤二郎(1970)によって邦訳された。原題の直訳は、『経済地理学における計量的分析への入門』である。当時、かなり話題になった本であるが、その邦題は『計量地理学序説』であった。筆者が指摘するまでもなく、両者のニュアンスは微妙に異なる。

そんなことよりも、この本を読んだときには、学部に入って「好きな地理学」をやれると思っていたのに、また数学の勉強をしなくてはならないのか、といったマイナスの気分の方が大きかった。文学部の地理学には、どういうわけか理科系から転科・転部してきた人が少なからず在籍していて、こういう人たちにとっては余り問題ではなかったようだが、根っからの文科の人間にとっては計量的手法の克服はほとんど絶望的な壁のようなものであった。

第二次世界大戦後～1970年頃までの人文地理学には歴史学と経済学の影響が大きかった。そこに突然、計量的手法が割り込んできた(という印象であった)。そのインパクトは当時のことを知らない世代の人にとっても、計量革命という言葉があることからも推察されるだろう。しかし、嵐は過ぎ去るのも思いのほか早かった。計量地理学の嵐が過ぎ去った後、人文地理学に大きな影響を与えたのは心理学であり社会学である。このトレンドは大きく人文主義地理学として括られる。ただし、誤解のないように言っておくが、もちろんたとえば当時の全ての都市地理学が計量的手法を用いたということではないし、そしてまた、それ以後の都市地理学が全て人文主義的なものというわけではない(阿部 2003, 2007)。

## V 筆者の院生時代

時代はあい前後するが、ここで筆者の院生時代に話を戻そう。大学院修士課程1年時の筆者を基準にして、当時の名古屋大学の院生(人文地理専攻)の顔ぶれを専門分野とともに記すと次下の通りである。富田和暁(都市)、吉津直樹(都市)、石黒正紀(人口)、林上(都市)、溝口常俊(歴史)、中村豊(メンタルマップ)、阿部和俊(都市)、杉浦芳夫(都市)、佐久間博(都市)、日野正輝(都市)、岡橋秀典(農山村)、北村修二(農業)、樋口忠成(都市)。

都市地理学を専攻した者のうち、中心地研究で修士論文を書いたのは吉津氏と林氏の2人である。富田氏は大都市圏研究、筆者は経済的中枢管理機能からみた日本の都市研究、杉浦氏は拡散研究、日野氏は都市次元研究で修士論文を書いている。卒業論文と修士論文のテーマが近い、あるいは殆ど同じ、つまり卒論の延長線上に修論があるのは石黒氏と筆者だけであった。富田氏は都市の生活環境整備、吉津氏は萩の夏みかん栽培、林氏は岐阜市の都市構造、杉浦氏は古利根川の土地利用、日野氏は歴史地理で卒論を書いている。

上述のように、院生仲間としては圧倒的多数とは言えないにしても確かに都市地理学を専攻した者が比較的多かったが、その理由は定かではない。松井武敏先生の専門は、学説史、地理学方法論、工業地理であり、喜多村俊夫先生のそれは歴史地理とくに新田村落(喜多村 1981)、灌漑水利慣行(喜多村 1950, 1973)であった。井関弘太郎先生のそれは三角州と沖積平野を中心とする第四紀研究である(井関 1972)。授業はなかったが、助手の森川滋先生の専門は工業地理である。松井先生は晩年体調を崩されていたこともあり、私の世代より下の者には積極的な指導はなかったし、3人の先生の直接的なアドバイスによる都市地理への誘

導といったこともなかった。

松井先生と喜多村先生のご退官後、私が愛知教育大学に転出（1976）するのと入れ替わりに、石水照雄先生と石原潤先生が着任されたが、2人の先生の着任以前に既に当時の院生たちの専攻（関心）は決まっていたのである。

こういう状況であり、都市地理学を専攻した院生が多かった理由は不明であるが、確かに有力な一因は当時のトレンドであろう。1つの理由としては、1960年前後の都市化論争を契機に日本の地理学界の中で都市地理学が活性化し始めていたことなどが挙げられる。この点については、拙著『20世紀の日本の都市地理学』（2003）を参照していただきたい。

また、当時は高度経済成長期でもあり何かと都市がクローズアップされていた時代でもあった。都市（その定義などは問題ではなく）、とくに大都市の動向が耳目を集めてもいた。

さらに全くの私見であるが、1968年に出版され、爆発的なベストセラーとなった羽仁五郎（1968）の『都市の論理』の影響も小さくないと考えている。当時大学1年生だった筆者は「都市」なるものが研究の対象となりうることに不思議な感動を覚えたものである。

これは1つのエピソードにすぎないが、1970年前後というのは高度経済成長の光と影が都市を舞台に交錯していたと言えるのではないだろうか。都市を研究対象とするのはもちろん地理学だけではないが、都市の存在そのものがクローズアップされるようになったことは都市地理学を専攻しようとする若い世代の増加に貢献したことは否めないと筆者は考えている。

1960年代後半の都市地理学の教科書的なものとしては木内信蔵編（1967）の『都市・村落地理学』があった。そして、木内信蔵・清水馨八郎・山鹿誠次・稲永幸男編（1964）の『日本の都市化』が

あった。この本はよく売れたらしく、筆者が所有しているものは1969年7月に10刷として印刷されたものである。

一方、木内（1951）が『都市地理学研究』でクリスタラーの中心地理論を紹介して以後、渡辺良雄、水津一朗、石水照雄、森川洋氏らが次々と魅力的な中心地研究を発表していた。

しかし、学部時代～修士の1年の頃の自分を思い出しても中心地理論をきちんと理解していたとは言えない。そして、学部の授業でもこの理論をきちんと聞いた覚えはない。集中講義としても中心地理論・中心地研究を専門とされる先生は来校されなかった。したがって、この理論を知ったのは前記の『都市・村落地理学』と研究室内での会話、つまり耳学問によってである。

1つの理論や学説を勉強する道の1つは確かにまず文献を通してからであるが、実は文献のみで完璧に理解することはむづかしい。成果の多くが外国語文献の場合はなおさらである。直接先生に質問するのは（授業中ならともかく）どうしてもはばかれるから、その時頼りになるのが身近な先輩である。吉津氏と林氏<sup>6)</sup>は中心地研究で修士論文を書いていたこともあり、我々にとっては頼りになるアドバイザーであった。その後いくつかの実証研究を重ねた林氏が『中心地理論研究』（1986）を上梓したのは周知の通りである。

名古屋大学の地理学研究室としてはこの2人を除いて、我々の世代で中心地研究で修士論文を書いた人はいない。比較的近いテーマとしては筆者のような者がいるが、経済的中枢管理機能から都市を分析していた筆者は既にこの機能と中心地理論は相容れないと思っていたし、中心地理論そのものが現在日本には不適合なのではないかと思いついていた。後に、この点については拙論としてまとめた（阿部1993）。

以上のように我々が中心地理論・中心地研究を



知ったのは授業を通してからではなく、書籍・論文・学会発表・耳学問を通してである。奇妙なことと言えば奇妙ではあるが、そういうものかもしれないとも思う。

筆者は1976年に愛知教育大学に奉職したが、愛知教育大学に移ってまもなく1980年に国際地理学会の大会が日本で開かれた。当時、31歳だった私は国際地理学会など遠いものでしかなく、端っこで秘かに参加見学というくらいのつもりだった。しかし、田辺健一先生からのお誘いの手紙をいただき山口岳志先生を紹介していただいた。山口先生はプレコンGRES（National Settlement Systems）の実質的な責任者だった。春先に山口先生の研究室を訪ねたとき、「参加されるなら、プレコンGRESから全部参加する方がいいですよ」というアドバイスをいただいてプレコンGRESから参加することになった。さらにあろうことかフランス語で口頭発表することになったのである。

プレコンGRESは札幌と仙台で行われ、私の発表は仙台だった。しかし、今、思い出しても冷や汗がでるとはこのことである。持参した論文はフランス人によるネイティブチェックを受けているから問題はないが、口頭発表はひどいものだった。フランス人のDalmasso教授もいたが、多分、私が何を言っているのかわからなかったに違いない。当時、「恥をかくなら若いうち」「若いときの恥は財産」という考えだったからできたようなものである。

本大会に出席すべく仙台から東京に行ったのであるが、その懇親会で初めてClavalに会った。すでに手紙を書いていたので、彼は私のことをよく知っていて「いつでもパリへおいでなさい」と言ってもらったように思う。大先生と初めて話をした緊張と感激で、この他には何を話したのか何も覚えていない。

プレコンGRESではこのほかにSinclair Rが参加していたが、何より、森川洋、谷内達、高橋伸夫先生たちと親しく話ができることが収穫だった。いずれも、ドイツ語、英語、フランス語に堪能な方たちで、羨ましく思ったものである。以後、学会の大会などでお会いすると親しく話をさせていただいたが、それはこのときの出会いが大きい。

愛知教育大学でのもう1つの思い出は1984年8月～1985年6月のパリ大学IVソルボンヌのClavalのもとへの留学である。フランスに留学した当時、筆者は30代半ばであり、経済的中枢管理機能を指標とした都市地理学の論文を発表していた。Clavalは既に多数の著作を発表していた世界的な地理学の泰斗であったが、その専門は都市地理学といっても歴史地理学的都市地理学、あるいは学説史であった。私自身の研究のことや言葉のことを考えれば、英語圏の都市地理学者の所に行くという選択があったかもしれない。しかし、Clavalの所に留学したのは、私自身いつか学説史を書きたいという思いがあったからである。その時の参考のためにClavalの研究姿勢や方法を見ておきたかったからである。この時の思いは後に『20世紀の日本の都市地理学』（阿部、2003）としてまとめた。

当時、Clavalの下にPitte J-Rという優秀な准教授がいた。奥さんは戸塚真弓という有名なエッセイストなので、ご存知の方も多いただろう。フランス語がままならなかった私は随分助けていただいた。Pitteを招へい教授として日本に招待したこともある。彼は後々ソルボンヌIVの副学長を経て学長になった。2004年にパリに行ったとき、学長室でご夫妻と一緒に食した鴨の味が忘れられない。

Clavalのところには私より先に磯部啓三氏が留学していた。フランス語に堪能な方で、1984年に私が留学したときに既にパリで学位を取得してい

た。彼にも随分世話になった。一橋大学のご出身で竹内啓一先生のお弟子さんである。竹内先生はClavalの本を訳出していたこともあって、Clavalとは仲が良かった。おふたりとも既に鬼籍に入られた。思い出するために「フランス語が一番できない私が残ってしまった」という思いがする。

この小論は筆者が大学に入学して以降、研究者の道を歩き始めてから愛知教育大学に就職し、フランスに留学するまでの期間についてのモノログである。学説史のようなものではないが、通常、論文などでは書かないことなどを書いてみた。

#### 注

- 1) 後に京都大学。著書に『ディドロのセネカ論』『自伝の文学』（いずれも岩波書店）がある。
- 2) Jean Cholleyは日本語の研究者で、当時、愛知県立大学、後にリヨン大学。訳書に夏目漱石の『わが輩は猫である』など。
- 3) このタイトルは当時の指導教授のアドバイスによる。この論文は同名で『地理学評論』（1973）に掲載されたが、当時から違和感があった。その理由は、この論文の内容を正確に表すタイトルとしては、「経済的中枢管理機能からみたわが国の主要都市」の方がふさわしいからである。このときの違和感は長く続いた。そして、後に「人文地理学のアイデンティティを考える—都市地理学を中心に—」（2007）をまとめる基となった。
- 4) この辺りの事情は現在の若い人には理解しづらいかもしれない。仕送りもなく、今のようにコンビニなどない時代では、下宿などで長い夏休みを過ごすことは結構むづかしいことだった。
- 5) テリトリーという用語は地理では早くから使用されている（水津、1969）。
- 6) 吉津（1978）は明治期の関東地方を、林は1970年頃の東海地方をフィールドにしていた。

#### 参考文献

阿部和俊（1973）：わが国主要都市の経済的中枢管理機能に関する研究。地理学評論46, 92~106.

阿部和俊（1975）：経済的中枢管理機能による日本主要都市の管理領域の変遷—広域中心都市の成立を含めて—。地理学評論48, 108~127.

阿部和俊（1977）：民間大企業の本社、支所からみた経済的中枢管理機能の集積について。地理学評論50, 368~369.

阿部和俊（1991）：『日本の都市体系研究』地人書房, 323p.

阿部和俊（1993）：日本の都市の階層性について。人文地理45, 94~105.

阿部和俊（2003）：『20世紀の日本の都市地理学』古今書院, 272p

阿部和俊（2007）：人文地理学のアイデンティティを考える—都市地理学を中心に—。人文地理59, 52~66.

井関弘太郎（1972）：『三角州』朝倉書店,

木内信蔵（1951）：『都市地理学研究』古今書院, 455p

木内信蔵（1967）：『朝倉地理学構造9 都市・村落地理学』朝倉書店, 262p

木内信蔵・山鹿誠次・清水馨八郎・稲永幸男（1964）：『日本の都市化』, 古今書院, 187p

喜多村俊夫（1950）：『日本灌漑水利慣行の史的研究（総論編）』岩波書店, 503p

喜多村俊夫（1973）：『日本灌漑水利慣行の史的研究（各論編）』岩波書店, 624p

喜多村俊夫（1981）：『新田村落の史的展開と土地問題』岩波書店, 473p

喜多村俊夫（1990）：『日本農村の基礎構造研究』地人書房, 227p

水津一朗（1969）：『社会集団の生活空間—その社会地理学的研究』大明堂, 455p

日本地誌研究所（1989）：『地理学辞典 改訂版』二宮書店,

野澤秀樹（1988）：『ヴィダドル=ド=ブラーシュ研究』地人書房, 274p

野澤秀樹（1996）：『フランス地理学の群像』地人書房, 322p

羽仁五郎（1968）：『都市の論理—歴史的條件—現代の闘争』勁草書房, 627p.

林 上（1986）：『中心地理論研究』大明堂, 694p.

吉田 宏（1974）：富山市における事業所支所の集積機能について—阿部和俊の所論に対するコメントを主に—。地理学評論47, 301~311.

- Beaujeu-Garnier J. (1971) :*La géographie : méthodes et perspectives*. Masson, Paris. 阿部和俊 訳 (1978) 『地理学における地域空間』 地人書房, 173p
- Claval P. (1964) :*Essai sur l' évolution de la géographie humaine*. La Belles letters, Paris. 竹内 啓一訳 (1975) 『現代地理学の論理』 大明堂, 293p
- Claval P. (1968) :*Régions, nations, grands espaces : géographie générale des essembles territoriaux*. M.Th.Genin, Paris.
- Yeates,M.H. (1968) :*An Introcuption to Quantitaive Analysis in Economic Geography*. McGram-Hill. 高 橋潤二郎訳 『計量地理学入門』 好学社, 238p